

## フランス語と日本語（59・5・19）

多田道太郎（昭18・9文丙）

私は昭和十六年に三高に入りまして、卒業が昭和十八年の秋でございますから、当時は二年半でございます。第三高等学校におきまして色々と勉強を、特にフランス語の勉強をした者でございます。それから何かのキツカケでフランス語をずっと勉強して、大学でもだいたい仏文関係の仕事を担当してきました。教養部といいますが昔の三高の延長でございますが、そこでフランス語を教えたこともございます。

ある日教養部でフランス語を教えていまして、学生が、仏語の否定は「ヌ」と「パ」に分かれている、こういうことを初歩の仏語で習う訳ですが、英語や独語に比べてどうして仏語は二つに分かれているんだ、という質問を突如されました。壇上で非常にドギマギした記憶がございます。こういう質問はなかなか余所の機会ではしてもらえないものでして、こういう意地の悪い質問をして教師を困らせるという伝統は、思えば僕等三高の学生のころからございましたし、今もやは

り京大教養部にはそういう意地悪い学生がいて、教師をいじめることを楽しみにしておるようです。

文学の講義をしたこともございますが、ある時試験の問題に「スタンダールについて知る所を記せ」という問題を出したところが、白紙の答案が出て参りまして、ただ一行、「汝、スタンダールについて何を知れるや」と書いてある。逆にこちらが質問されまして、そう言われるとあまり知らんなあと思つて反省したようなわけでございます。そういう相互批判と言えば聞こえは良いけれども、教師をいじめる伝統もやはり自由の伝統から出て来たことだと思つております。

三高で私はいろんな影響を受けましたが、今でも無意識の内に強く残っているのは「紅もゆる」という歌ではないかと思ひます。この歌は三高という存在を知らない人でも知つてゐるという位の有名な歌であります。上智大学の渡部昇一という方が一高と三高の寮歌を比較して大いにその精神が違ふと仰言つた。どこが違ふかという点、言葉の問題ですね。一高の寮歌は

嗚呼玉杯に花うけて／緑酒に月の影やどし……

と一行目二行目から漢語が飛び出す。それに比べて三高の寮歌はと言うと

紅萌ゆる岡の花／早緑匂う岸の色……

こういうふうには全部やまと言葉で漢語がない。すくなくとも一番については全然ない。これは大変面白いことであると言う指摘をなされている訳です。僕もそう指摘されて、なるほど、それに

気がつかなかつたのは迂闊だつたと思ひましたけれども、あらゆることはその中にドブツと漬かつておればなかなか判らないものです。一寸離れた所から見ると見えてくる。これも一高や三高の卒業生でない人が指摘したと言う点が私にはかなり面白いように思ひます。

大雑把に言つて漢語というものは日本に入つて来て律令体制の基礎をなしたものである。つまりこれが外から入つて来る文明の中軸である。これをやらなければ駄目だという意識があつて漢語が入つて来る。ですから肩書などになると大体漢語でございます。やまと言葉で表すと甚だ權威が薄らぐような感じが致します。權威とは正反對のところをやまと言葉があるように思ひます。そういう訳かどうか、わが三高の卒業生の中には官僚として大を成した人の数が高一の卒業生に比べて著しく少ないのです。むしろ自由業とか、そういう所で伸びた人の数が多いようであります。一高出身者の中には、東大法学部へ行つて日本の律令体制の現代版であるところの官僚制度の中で大きな仕事をなさつた方が数多くいらつしやるようでございます。私達の伝統は自由の伝統でございましたので、そういうものとは縁が薄かつたのでしよう。「紅もゆる」なんて歌をしよつちゆう歌っている間に官僚として偉くなつて行く気分が段々無くなつて行くのではないかという風なことを四十年経つた今、反省ではございませんで、むしろ自慢かもしれませんが、そういうことを思つたのです。

漢語の要は漢字でございます。今日はフランス語と日本語といつた茫漠とした題を掲げま

したが、ヨーロッパ系の言葉と日本語、あるいは中国語とを分つ一番大きなものの一つは、文字が象形と言いますか、形象と言いますか、形がちゃんと現れている。それが無意識のうちに私達の行動形態の一番基礎に沈んでいる。

たとえば旅の字でも、旗があつてその下に人が群がっている。こういう感じでございます。ですから旅団などと言う時には元の意味が非常に生きて来る。日本語の「たび」と中国語の「旅」とは元の概念が非常に違う。大きな軍旗を掲げて軍隊が移動するのが「旅」のイメージでございます。今日ジャルパックの旗の下に大勢が列なつて行くのは旅行の本義では無いなどと言われるけれど、元の意味からすればジャルパックこそ中国の「旅」の伝統を受け継いだものと言う感じもいたします。

中国はヨーロッパに比べてどうしてあの様に昔に、紀元前二千年も前に大帝国の統一が出来たのか、これは難問題であり、非常に大きな問題です。まあ考える限り一番有力な原因は、漢字、形を見れば物が判るといふ、北の人も南の人も同じように山が想像出来るというのが支配体制として中国が成功した、ヨーロッパが永年成功出来なかつた一つの大きな理由であると考えられています。そういう大きな文明系の中の一つとして、小さな東の方の島国の中に私達は日本文化を築いて、日本語を持ったのです。漢字の圧倒的な力というものが、私達の背骨になったことは間違ひございません。それが今日の一高から東大法学部まで続いている大変大きな力であることも

間違いないとあります。

しかし一方、日本語を論ずる時に、たとえばフランス語を論ずる時にラテン語だけでは論じられないように、やまと言葉が大きな力を持つ。ですから一高だけではなく、三高も大変重要な役割を果たしたということも一つの例証として申し上げたいわけであります。

漢語の方は男が担って、やまと言葉の方は女が担った。やまと言葉を表出するのに仮名、仮の名というものが有り、こちらはほんとうのもので、真名という、これが本物の文明の言葉で、これが仮にそういうものを表記するものとして漢字を変形しながらやまと言葉を作った。千年前にそういうことをした。恐ろしい発明力であったと思います。どうしてこれが偉大な発明であったかというのは、たとえば南太平洋にフィジーという小さな島国がございます。そこには勿論ネイティブの言葉はありますけれども、表記法、独特の表記法を持っていない。世界中には独特の表記法を持たない国民はたくさんあります。その中の一つとしてフィジーの人達は今新しい表記法を作ろうとして一所懸命に考えているのです。フィジーに入っている表記法はたとえばヒンズーの言葉が入っている。中国の言葉が入っている。英語はもちろん入っている。それから日本語が商品の名前として入って来ている。こういう幾つかの言葉をズツと見比べてどういう表記法にしたら良いかなあとフィジーにいるラスチガールと言う僕の親友のインテリがいろんな表記法を見ながら考えます。彼の説を聞きまして非常に面白い刺激を受けました。それはイギリス人やフラン

ス人が日本語を批判するよりもっと面白い観点があつたという気がするのです。たとえばヒンズーの文字は（これは私も良く知りませんが）彼も印象だけで言っているのですが）ズーツと一本線が引いてあつて、こんな感じで繋っている。天の栄光に対して人間がぶら下がっているというイメージを此処から受ける。中国の文字はどうかというと何となく威張っている。非常に安定している。大地の上に足を踏みしめている。何となく威張っている。その上に複雑な体系を作り上げている。これが漢字という感じがすると言うのです。

それでは日本語はどうかというと、彼は即座に紙の上にこういう流れを書いて、日本語となるとこんな感じがする。これは一つの流れのようなものです。上から下にズーツと流れて行くような一つのストリームとして考えられる。まあ抽象的に言えば、一種連続性と考えてもよい。だから何となく前のものと後のものの繋り、そういうものとして日本の文字の特徴がある。と彼は言います。ただし、その中にとりどころ水の流れにたとえれば淀みみたいなものがある。木の根っこがあつてそこにゴミが溜まって行くようなものがある。これが中国から借用した漢字ではないか、と彼は言います。まさにその通り、彼が後から実物の日本語を持って来て、これが漢字じゃないか、これも漢字じゃないかと言うと確かに漢字なんです。私達の日本語の構造はこういう表記法に端的に現れているように、一つの流れの中に彼は淀みと叫びましたが、むしろ通気孔のようなもの、穴を開けておきましてそこから外来文化を取り入れていく。そしてこの流れをまた形

作る格好になっているようであります。ですから日本語というものは、外来文化を取り入れるのに無意識の内にいろいろ面白い工夫をしている。特に大きな工夫は漢字仮名混じり文といいますが、混じっていてもそれを一つの流れの中に流してしまふような、そう言う連続性を無意識の内にいろいろ身に付けているようであります。流れの方、繋りの方の面を重視しますと、純粹のやまと言葉に近くなる。こちらから入って来るものだけを注視しますと、こちらの方は漢字文化、しっかりした体系性を持った、然も普遍性を目指すような、そういう漢字文化に傾くようになっています。その一つの例が一番最初に申し上げた一高の寮歌と三高の寮歌の両方の対立として現れている訳でございます。

歴史を見ますと、千年前にこういう大きな漢字の流れを我々は取り込んで、千年経ってもなお我々は漢字を入れ続けていると言つてもよいくらい漢字の力は大きなものでございます。同時に私達の先祖は百年、二百年前から嘗々辛苦してヨーロッパの觀念、ヨーロッパの物、ヨーロッパの体系というものを取りいれてきました。これが丁度漢字と同じような位置に置かれていて、ポコポコポコと開いている所に通気孔みたいにして外のものがドンドン入ってくる。ですから昔ここに漢字が入って来た。要という漢字が入って来た。そういう所に私達は今度はエッセンス、片仮名の文字をどんどん入れてきました。ついですが、中国に逆にこういう造語を輸出して言つた訳です。通気穴の中で鍛えられた漢字ですから、独特のやまと言葉の漢字というものを、和製

の漢字をつくりあげて、それが中国に逆輸出されて、観念、社会、思想、哲学などの新しいものまで輸出したという面がございます。そういう穴の開いたところへ今度は片仮名の文字が入ってきました。こういうふうな構造自体フランス語には全然みられないのでございます。フランス語は完結してからはほとんど外来文化の影響を受けておりません。十九世紀になって英語が入り、二十世紀になるとウィークエンドとかアメリカ製の単語がドンドン入って保守的な、純粹のフランス語を守ろうとする人達を歎かせておりますが、構造としてのフランス語は殆ど変わっていないという風に考えられます。

私達は構造的にそういうものを取り入れるような形式の言葉をつくりあげて来た。そして今日片仮名文化の隆盛を見ているわけでございます。片仮名とは御承知のように漢字を読下すときの補助手段として使われて来たものです。漢語が外から入って来た時にやまと言葉のように漢語を読む時の、外来文化をどういう風に読んだら良いのかと言うことの補助手段ですね。これを片仮名で書く。片仮名というのは外来文化を取り入れるのに何処となく非常に便利な道具である、と言うのが私達の意識の中にありますから、そこで大体アメリカの物もフランスの物もすべて片仮名表記しています。

一般に流布している考え方にフランス語は論理的である。日本語は非論理的である、こういう考え方があります。論理的というのはその定義が難しいですが、仮に客観的であり感情を混じ



えないという意味だと致しますと、フランス語はその成立からして決して論理的な言葉ではございません。先程申し上げた否定の言葉が二つに跨つてある。「パ」というのは後から加わつて来た、意味を強めるものです。もつとよく使われるものに、一步でもということを感じに強めるためにこの「パ」というのを付けます。今はアプソリュマン・パ、「絶対そんなことはありません。」なんてフランス人が言う時はもう「ヌ」は何もなく「パ」だけで言います。そちらの方が強くなっている。感情的な強勢といえますか、そういうものはフランス語の中で大きな位置を占めている。文章語の中ではたとえバルソーの本を読んだり、デイドロの本を読んだりしますと、私達日本人として意外なことに、最も美しいとか、最も何々であるという最上級が連ねられています。これも感情的に強めている。これは日常我々もよく経験していることですけれども、男性よりも女性が、女性でも年輩の人よりも若い人の方が「絶対そんなことはない……」「絶対……」とよく言いますね。私の娘なんかも絶対結婚しないわと、ついこの間まで言っていたのがコロツと結婚して非常に幸せな顔をしている。まあ「あて」にならない絶対でございます。

日本人の観光客がパリに行きまして、違う文化の中に入ると緊張するようです。大抵水が飲みたくなる。私も何度かパリに行つて始めの頃は水が飲みたかった。パリでは、水を飲むのは蛙とアメリカ人と日本人だと意地悪なことを言う人がおりますけれども、それは文化的緊張度に比例して水が飲みたくなる、喉が乾いて来るというわけです。壇上に水が置いてありますけれども、

この中で緊張しているのは僕一人で、他の方は非常にリラックスしていらっしやるから僕の前だけに水が置いてある。そういうことで日本人観光客は緊張している。水を和仏辞典で引いて見ると「オー」というのが書いてある。ですからこれこれと違ってその観光客は喫茶店のボーイさんに向かつてオー、オーと叫んだ。しかし水という概念は彼等の中では結び付かない。御承知のように部分冠詞という変なものを付けてドウロ、ドウロシルブレと言わなければ通じない。通じない方が悪いのか、それともどちらが悪いのか、大変大きな文明史の問題です。部分冠詞に論理性があるかどうか、大きな問題でございます。冠詞自体が我々の目から見ると変なもので、もともとは指示する役割を持っていた。その水とか、あの何々というように指示する役割を持ったのが冠詞の役割だったので、そのうち指示していない、何か判らないけれどもというので不定冠詞が出てきます。不定冠詞とも、部分冠詞とも付かないものがドウロというふうになにかあるものの前に付いて来る。初歩フランス語を教える時の一番の悩みがこの部分冠詞の説明です。教師が悩んでいることが、あるいはフランス人が悩んでいることが学生に判るはずがない。こんなことはほんとはどうでもいいことなんです。ほんとはどうでもいいことだけれどもフランス語を知らうと思つたら、パリへ行つて、ドウロと言つて下さい。こういうものなんです。こういうものが必ずしも合理的なイメージとしてあるのではございません。ただ言えることは日本語の場合には空間、距離、隔たり、近さ、そういう空間的な概念を表す言葉ががちちりある体系を成して

います。フランス語の場合、そのもとになっているラテン語もそういうものがかなり乏しい。冠詞の役割も段々怪しくなつて来ておりますし、日本語だったら「こそあど」の体系がございました、それに対応してフランス語では「シ」とか「ラ」とか付けて、こちらのもの、あちらのものというふうにして苦しい言い方をする。しかも部分的にしかなかない。あんまり使うとフランス語らしくなくなつてしまふ。それに対して日本語の場合は非常にしつかりしている。

私達の中には空間の言葉が強く染込んでおります。ですから、こちら、こちらは、あちら、あちらではこうなつてゐる、どちらですか。こういうふうにあなたとか、そなたとか、こなたとか代名詞の機能もまた空間詞が果してゐるわけでありませう。人称代名詞がほんとうに日本語として定立してゐるのかどうか、これは大きな問題です。近代になればなるほど人称代名詞がはつきりして来るといふのが世界中の共通の流れでございますが、日本で言いますと、室町期にいろいろな人称代名詞が出てまいります。いろんなものが出て来るだけで、システムとしては日本語はこれで定立したといふふうな人称代名詞はございません。むしろバラバラさといふものもひとつとひとつとなつて来た。そういう例でございます。そして日本語である代名詞を使ひますと、ある値打を持つていたものが段々値打を持たなくなりませう。僕といふのは下僕の意味であつたけれども段々上の方へ行きまして、いま僕という威張つた感じがする。あなたといふのは貴様、貴い様と書いてあるので敬意を払つたはずでありますが、いま貴様なんていふとどつかれるような、そ

う言葉に代名詞というのは端倪すべからざる変化を絶えず続けているのです。「あなた」という人称代名詞も、なかなか日本人にとっては使い難い。使い難かったからこそ南極越冬隊へ故郷の奥様が手紙を出された、その時一番感動的な言葉は電報で「あなた」と書いてあったのが一番感動的であったと言います。しょっちゅう使っていたら感動的はずがない。滅多に二人称の代名詞を使わないところからそういうことが起こって来たのでしよう。

私が三高に入る前でしたけれども、「父よ あなたは強かった」という軍歌が流行ったことがあります。その時教壇に立った国語の先生が「お父様に対してあなたとは何と失礼なことを言うか、こういうことをやるから日本は駄目になるんだ」と悲憤慷慨されて一時間講義されたのを未だにはつきり覚えておりますけれども、それほどあなたという言葉は珍しい言葉だったのです。その頃流行歌では「あなたと呼ばば、あなたと答える……」が丁度昭和十二、三年頃に出てまいりました。それが人称代名詞の一つの大きな変化であったのです。とにかく人称代名詞というものと動詞というもの、もっと一般的に言いますと、この構造が日本語では非常にヤワなもので、ほとんど定立されていないものとして多くの人の意識に上がっているところがございます。そういう価値評価は別としまして、フランス語と日本語を比べて見る場合、英語もそうでありますけれども、SプラスV構造というものが基本的な問題であることが明らかであります。フランス語ではこれに足してR構造、これは色々言いますが、簡単に目的語と考えても良い。主語があつて、動

詞があつて目的語が来る。この構造は重要なもので、英作文、あるいはフランス語で作文するとき、最初に厳しく教えられるのはこのSプラスVプラスRという構造でございます。日本人の場合、このSという構造、まず主語が来るということがなかなか飲み込めない。このSプラスV構造というのがヨーロッパの歴史、フランス語の歴史の中で出来たのはそんなに古いことではございません。ボルケナウという思想家の遺作の中に「人称の成立」という面白い論文がございます。ボルケナウの説に依りますと、これは北欧の方からやって来た。「私」という言葉を取り出してという習慣が出てまいりまして、それがケルト、ゲルマンを経てやがてフランスに入った。そこから「私が、書く、手紙を、友達に」という構造が出て来るという訳でございます。ラテン語では時とか、あるいは人称さえ動詞の中に含まれていた訳です。俗ラテン語になってこれが分解致します。動詞の終りの方の変化が聞き取り難くなって、そういう音声学的な理由からこれを取り出して始めにジュ「私」を置いた。人称が動詞とは別に出て来たという説がございます。ボルケナウの説はそうではなくて、人称の力が北の方からやって来て、そして先ず「私」を始めに置く、こういう構造が十五世紀頃にできてまいります。十七世紀になりますと、必ずこういう構造でなくてはいけないという文化が成立します。フランス語はこうでなくてはいけないと決めた訳です。

決めたらその通りやる。皆がそのようにしやべる。こういうことがフランス語の歴史の中で、

また文明の普遍的な言葉として大きな意味を持つていた訳です。ですから当時リバロールという人がフランス語の精華を自画自讃致しまして、「私が書く手紙を友達に」、これ程論理的な構造があるだろうかと言っております。何故論理的かといえますと、先ず主体があつて、動作がある。それから目的語が出て来るのが人間にとつて最も自然だからと彼は言つてゐる。

しかし最も自然なのかどうかは疑問がございます。必ずしもそれが自然だとは言えません。言えることは、私というものが取り出されて切離されて、それが先ず宇宙の中心に座るといふ考え方ですね、文章の一番始めに来るといふことが最も大きな意味を持つてゐることだと思ひます。

ボルケナウという人は二十世紀の西洋文明の没落を予感した人です。シュペングレーやトインビーの後を継いだ文明史家です。ですから、高らかにエゴイズムを主張、エゴイズムを主張してゐるといふよりも、むしろ自分といふものが世界からどれ程切り離されてゐるか、この構造を顕わにしたのがSV構造だといふことを彼は強調してゐます。

北の方からやつて来たさういふ切離しの構造、自分だけがという構造に対して、南の方、西の方から丁寧語の系統がやつて参りました。あなたという時に一人称の「あなた」をつかわないで、二人称の「あなたがた」を「あなた」に代用した。これはスペイン語に強く残つておりますけれども、さういふ謙讓の、礼儀の言葉、これは日本人が得意とするところでありますけれども、さういふものは西南の方からやつて来た。そして丁度真中のパリで出会つた。その葛藤の中から近

代文明の中枢としてのパリが出て来たというのが大雑把に言えばボルケナウの説でございます。

一寸序でに注の形で言いますと、一人称、二人称、三人称と並べますが、こういう並べ方に必然性があるのかということが言語学者の間で色々問題になっております。たとえばヴァンヴニストなどは一人称が最初でこれが一番強い。二人称は非一人称である。私ではない誰かということ、その人に向かって話しかける。こういう構造がある。それに対して三人称というのは非人称である、人称にならないものを三人称として定立させて行く。非人称動詞というのがフランス語にございます。Il va…。フランス語の初歩でこういうことを習います。この「彼」は論理的に言つて当然神様でないといけません。非人称の中にはおそらく神の觀念が何処となく忍び込んでいただろうという仮説を申し上げておきます。雨が降る。彼が雨を降らしている訳です。日本人だったら雷の神と考へるところです。何かわからない宇宙の神秘が降らしているわけです。そこにもやはり神概念に近いものがあります。しかし逆に考へますと、そういう神概念というものさえも一人称、二人称、三人称として定立させて、三人称の中に押し込めてしまふ。そこにフランス人の、十七世紀の人間が持っている思想の運命が感じられるわけです。

フランス語にとって最も大事なものの、我々日本人にとってなじみ難いのはこういう構造の概念でございます。

日本語の場合には構造というよりはアモルフな感じが致します。たとえば、主語が陰に隠れて

殆ど意識に上がりません。私は今日京阪電車で京都へ来た。こういう構造の中で、私はというのは省いても省かなくても、どちらでも良いことですね。ほかのものすべてそうです。京阪電車で来ようが、ほかの物で来ようが大して意味はない。一番大事なのは「来た」ということです。動詞が依然としてずっと優位に立っているということが近代ヨーロッパ語と比べての日本語の特徴でございます。

学習院大学の太野晋教授が調査されたところでは、『徒然草』以前の古典日本語に使われた動詞の九十三%以上が現在なお使われている。ですから聞く、来る、見る、持つとかの基本的な動詞は変わらずに日本語の一番底の方を流れている中心的な支えみみたいな形になっているわけです。それでは動詞が中心になっていることはどういう文明史的な意味を持つのか、という所へ行きたいわけですが、時間がございませんので省略致しましてごく現象的なことを付け加えます。

動詞が大きな意味を持っておりまますから、いい日本語を書こうと思えば動詞に神経を使って、そして主語述語にはあまり神経を使つてはいけないというのが、むしろいい日本語を書くための基本的な原則でございます。

戦後日本人の日本語は何処が最も大きく変わったか、これが興味のあるところですけれども、変わっているその中にいるとなかなか掴めないものです。フランス語のその変化、十五世紀から十七世紀にかけての大きな変化も、当時の人には論理的という言葉でしかほとんどとらえられな



かったのでございます。ですから私達の今の言語変化もおそらく百年、二百年、三百年のうちにとらえられるものだと思いますけれども、仮説を申し上げますと、動詞の座りが悪くなっている。その動詞だけでは何が言い切れない、どうしてこれを繋いで行ったら良いのか、どう言う側面からこの動詞を見て行ったらいいのか、というところに不安定な感じが致します。

戦前ある有名な政治家は「何々なのであるのである」と言った。「である」と断言し難いので「のであるのであるのである」。機関車がゴトンゴトンゴトン、やがてパツと止まるような、そういう感じ、あれは動詞の不安定性を示した最初の微候の一つだと思えます。

戦後ある文芸批評家は言葉の終わりを「である」にするのか、「のだ」にするのか非常に悩んでどちらとも決めかねて到頭ノイローゼになって筆を絶ったというお気の毒な方もいらっしやいます。言葉尻というものに敏感だったのです。言葉尻も単なる言葉尻じゃなくて、動詞をどのように落着かせるかという感覚に繋がっているのです。

近頃いろいろ式というものが盛大になって来ました。たとえば結婚式などで、「次は新婦の高校時代の親友に一言述べて頂きたいと思えます」とか、「では次に何とかに移りたいと思えます」と。いちいち思わなくてもいいと思うんだけれども、思わないと何となく落着かないという気分が起こつてますね。「それは………と思えます」この後ろに付く何か、まあ解釈すれば「司会者はそういう風に思っているんですけれども、他の人々はこういう風に思っていらっしゃるでしょう

ね」他の人の顔をジーツと見渡して、『あゝ、やはりそう思っただらうしやるようです。ではそう致しましょう。』こつういふことになるわけです。

名詞はモノにかかります。名詞をたくさんうしろに従える構造は倉庫に商品をたくさん蓄える資本主義にふさわしい、といったのはイヴァン・イリツチです。動詞はその点、個人のからだ中心です。おおきな蓄積とは関係ありません。ただ、人間と人間の関係、人間とモノとの関係に敏感に反応いたします。私達は戦後、この関係をじつと見つめてきているのだ、という気がいたします。

おわりはまとまりませんでした、御清聴ありがとうございました。

(京都大学人文科学研究所教授)